

## 平城京左京三条一坊二坪の発掘調査

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所  
都城発掘調査部（平城地区）

調査地：奈良市二条大路南3丁目

調査期間：2023年10月3日（火）～（継続中）

調査面積：約1125m<sup>2</sup>（東西45m、南北25m）

### 現地説明会を開催します

2024年1月27日（土） 11:00～15:00 ※小雨決行

定時での説明はおこないません。巡覧していただき、職員が随時説明します。

### 概要

今回の調査では、掘立柱建物群や掘立柱塀をはじめ、井戸と考えられる大土坑や礎石を捨てこんだ土坑群などを確認しました。計画的に配置された掘立柱建物群や坪内を区画する掘立柱塀など、平城京左京三条一坊二坪における土地利用の実態が明らかになり、その性格を考えるうえで重要な成果となりました。

### 1. 調査の経緯と目的

今回の調査地は、朱雀門の東南約200mに位置し、平城京左京三条一坊二坪にあたります（図1）。平城宮の正門である朱雀門に近く、朱雀大路、二条大路と近接していることから重要な場所であったと想定されています（図2）。現在、奈良県の地域デザイン推進局平城宮跡事業推進室では、平城宮跡歴史公園朱雀大路東側地区の整備に向けた検討を行っています。これにともない、奈良文化財研究所では昨年度より左京三条一坊二坪における遺構の様相を確認するための発掘調査を継続して実施しています。

左京三条一坊二坪では、これまでに史跡平城京朱雀大路跡の整備に関わる発掘調査や、国土交通省の平城宮いざない館の建設にともなう事前の発掘調査が実施されてきました。これによって坪の西辺と北辺は築地塀で囲われた空間であったことがわかっています。ただし、これまでの調査はいずれも坪の周縁部でおこなわれたものであり、左京三条一坊二坪の中心部分の土地利用の状況はほとんどわかっていませんでした。

昨年度実施した平城第650次調査の南区では小型の掘立柱建物を検出しており、これに

よって坪の東南部の様相が明らかとなりました。坪の北部にあたる平城第 650 次調査の北区では、小型の掘立柱建物や東西・南北方向の柱穴列、石が多数埋まつた土坑を確認していました。

今回の調査では、平城第 650 次調査北区の成果をうけて、遺跡の様相を把握するべく西側に調査区を広げました。調査区は南北 25m、東西 45m で、調査面積は約 1125 m<sup>2</sup> です（うち 475 m<sup>2</sup> は平城第 650 次調査北区と重複しています）。調査は 2023 年 10 月 3 日（火）から開始し、現在も継続中です。

## 2. 主な検出遺構（図 3）

今回検出した遺構は、奈良時代とそれ以降の大きく 2 時期に分かれます。

### 奈良時代の遺構

**南北塀** 調査区東部で検出した南北 10 間（約 24m）以上の掘立柱塀。調査区を縦断し、調査区外北方および南方へ続きます。平城第 650 次調査南区では続きが確認できなかつたため、二坪内の北部を東西に区画する塀と考えられます。

**東西塀** 調査区南部で検出した東西約 34m の掘立柱塀。東側で 3 間（約 8.0m）、西側で 5 間（約 13m）を検出し、中央部には約 13m の空闊地があります。東端で南北塀に接続しており、西はさらに続く可能性があります。西側では南北流路と重複しており、東西塀のほうが新しいです。

**建物 1** 調査区東北部で検出した桁行 3 間（約 5.4m）、梁行 2 間（約 3.3m）の南北棟の掘立柱建物。南妻柱を欠いています。柱穴には柱根が遺存するものもあります。大土坑と重複しており、建物 1 のほうが古いです。

**建物 2** 調査区東北部で検出した桁行 3 間（約 6.0m）、梁行 2 間（約 3.9m）の南北棟の掘立柱建物。土坑群 3 と重複しており、建物 2 のほうが古いです。

**建物 3** 調査区中央部北半で検出した桁行 3 間（約 6.0m）、梁行 1 間（約 3.0m）の南北棟の掘立柱建物。土坑群 3 と重複しており、建物 3 のほうが古いです。

**建物 4** 調査区西北部で検出した桁行 3 間（約 6.8m）、梁行 1 間（約 3.0m）の南北棟の掘立柱建物。南北流路と重複しており、建物 4 のほうが新しいです。

**建物 5** 調査区西北部で検出した桁行 3 間（約 6.8m）、梁行 1 間（約 3.0m）の南北棟の掘立柱建物。東西柱穴列、南北流路と重複しており、建物 5 のほうが新しいです。

**建物 6** 調査区西北部で検出した掘立柱建物。東西 1 間（約 2.1m）、南北 4 間（約 8.1m）を検出しました。調査区外へ続くと考えられます。

**南北柱穴列** 調査区東北部で検出した掘立柱の柱穴列。南北 3 間（約 7.7m）を検出しました。南北溝と重複しており、南北柱穴列のほうが新しいです。調査区外へ続く塀か、建物の一部である可能性があります。

**東西柱穴列** 調査区西北部で検出した掘立柱の柱穴列。東西 4 間（約 11m）を検出しまし

た。南北流路、建物5と重複しており、南北流路より新しく、建物5より古いです。東端から北にのびるとみられる柱穴を調査区北壁で確認しており、調査区外北方にも続く可能性があります。

**大土坑** 調査区東部で検出した一辺約2.7mの方形の大土坑。土坑の規模、形状や埋土の状況から、井戸の可能性が考えられます。建物1と重複しており、大土坑のほうが新しいです。

**南北溝** 調査区東端で検出した幅50~60cm、深さ約50cmの南北素掘溝。調査区を縦断しております、調査区外北方および南方へ続きます。南北柱穴列と重複しており、南北溝のほうが古いです。溝の断面は逆台形状で、水が流れた痕跡は観察できないことから、比較的短期間のうちに埋め立てられたと考えられます。坪内を東西に区画するために掘られた溝の可能性があります。

**南北流路** 調査区西部で検出した幅0.6~6.0m、深さ10~30cmの自然流路。調査区を蛇行しながら縦断しております、調査区外北方および南方へ続きます。流路の埋土は細砂~粗砂からなります。東西塀、建物4、建物5、東西柱穴列と重複しており、南北流路のほうが古いです。

### 奈良時代以降の遺構

**土坑群1** 調査区西南部で検出した土坑群。径0.9~1.5mの土坑が南北に4基並んでおり、内部には径60~80cmの石があります。石には平坦面をもつものがあり、礎石であると考えられます。ただし、いずれも平坦面は傾いていることから、後世に捨てこまれたものと考えられます。

**土坑群2** 調査区西北部で検出した土坑群。径1.0~1.2mの土坑が東西に2基並んでおり、内部には径80~90cmの石があります。土坑群1と同じく後世に礎石が捨てこまれたものと考えられます。

**土坑群3** 調査区東北部で検出した土坑群。大型の土坑と3基の土坑からなります。大型の土坑は東西約4m、南北約7mで、調査区外北方へ続きます。土坑の中からは、径50~90cmの石を9基検出しています。このほかの3基の土坑は、それぞれ径1.0~1.3mの土坑で、内部には径0.7~1.0mの石があります。石には平坦面をもつものがあり、礎石であると考えられます。ただし、多くは平坦面が傾いていることから、後世に捨てこまれたものと考えられます。土坑群3のなかには建物2、建物3と重複するものがあり、土坑群3のほうが新しいです。

### 3. 主な出土遺物

今回の調査では、奈良時代の土器類・瓦磚類などが出土しました。土器類は、須恵器の壺や甕などの貯蔵具が食器類よりも多く出土しています。また、瓦磚類は藤原宮期から奈良時代までのものが出土しています。

## 4. まとめ

### **①計画的に配置された掘立柱建物群や坪内を区画する掘立柱塀を確認しました**

調査区北半で掘立柱建物を 6 棟確認しました。これらの建物群は、南端の柱筋をほぼそろえて東西に整然と並んでいました。また、調査区東側で南北方向に、調査区南側で東西方向に展開する掘立柱塀を確認しました。二坪では、坪内を塀で区画し、小規模ながらも計画的に建物群を配置していたことがわかりました。

### **②多数の土坑とそこに捨てこまれた礎石を確認しました**

多数の土坑を検出し、合計 18 基の礎石とみられる石を確認しました。石の大きさは径 50 ～ 90cm で、ほとんどのものに明瞭な平坦面が認められます。出土状況から、後世に土坑へ石が捨てこまれたものであると考えられます。調査区各所で石が見つかっていることから、付近に複数棟の礎石建物が存在していた可能性が考えられます。

### **③左京三条一坊二坪における土地利用の実態が明らかになりました**

左京三条一坊二坪の北半部分を中心に広く発掘調査した結果、掘立柱建物や掘立柱塀をはじめ井戸と考えられる大土坑や礎石を捨てこんだ土坑を確認し、その土地利用の様相が明らかになりました。坪内を塀で区画していたことや、掘立柱建物群が計画的に建てられていたこと、調査区付近に複数棟の礎石建物が存在していた可能性があることがわかりました。

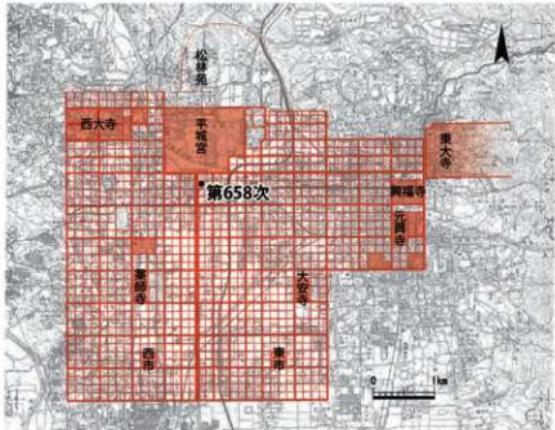


図1 今回の調査区位置図

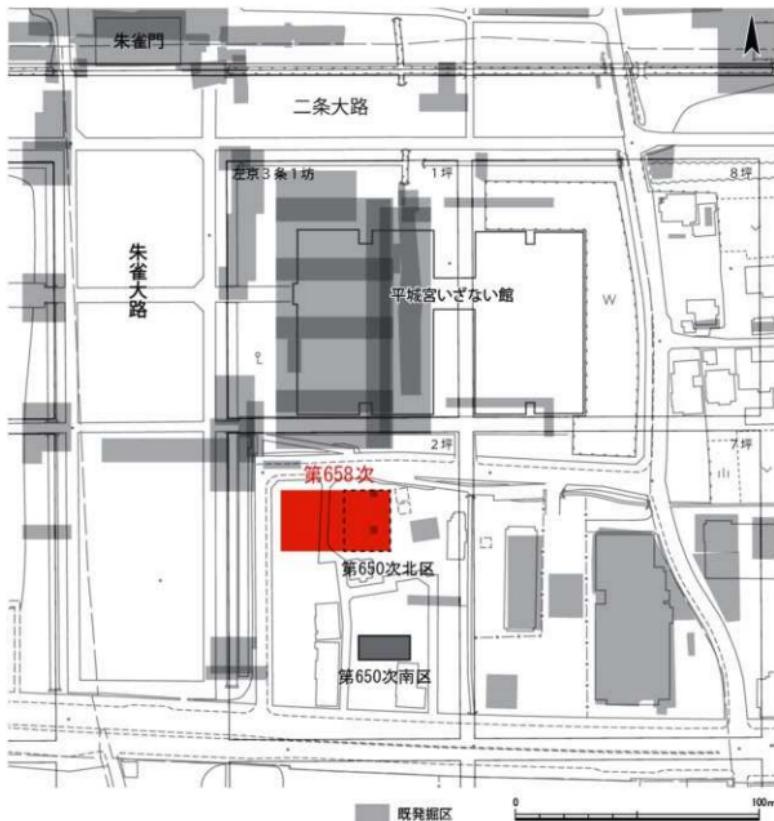


図2 今回の調査区周辺図

図3.第658次調査区遺構図 1:200

